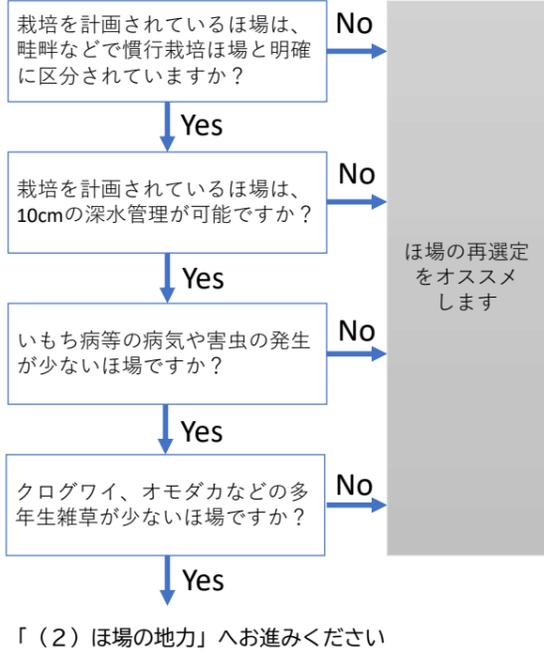


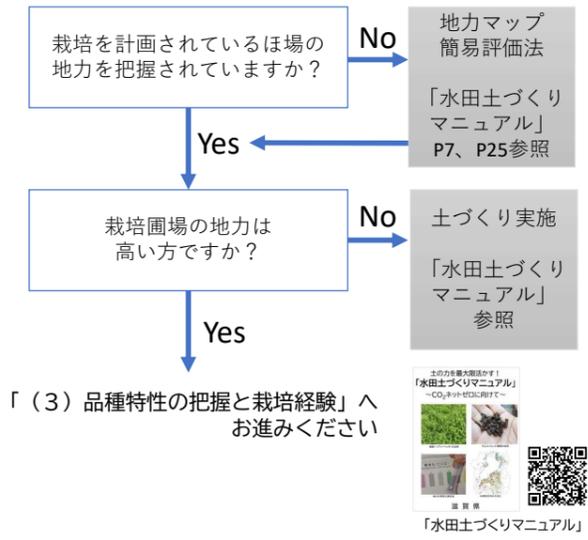
1 オーガニック栽培の事前チェック

(1) ほ場の選定



注) 乗用型の水田除草機による除草を行う場合は、長方形で面積が広く、比較的耕盤が浅い圃場が適しています

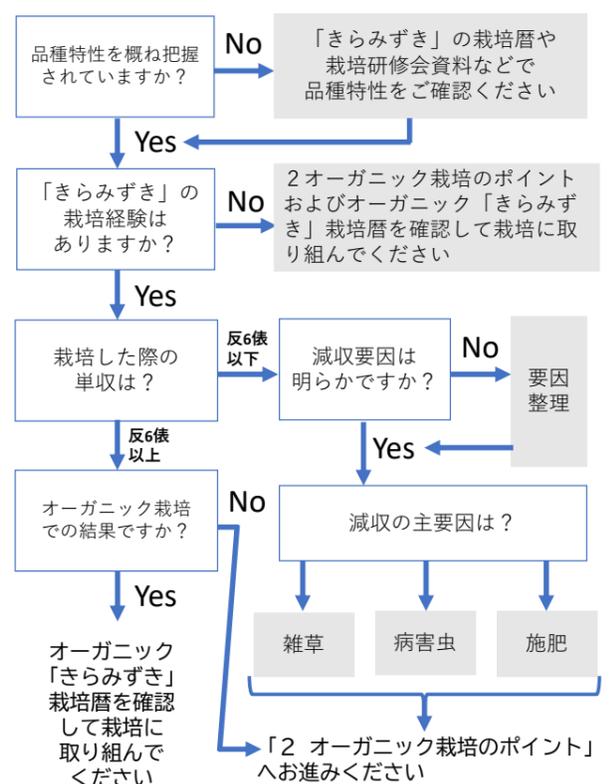
(2) ほ場の地力



「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は中生品種であり、「コシヒカリ」と比べると生育期間が長くなります。このため、肥料切れを起こさないように注意が必要です。地力の不足分を補うのが施肥の基本です。地力が高ければ、施肥量を抑えることができ、かつ、肥料切れのリスクも回避しやすくなります。

(3) 品種特性の把握と栽培経験



2 オーガニック栽培のポイント

(1) 雑草対策

①育苗

○深水管理や雑草との競合に打ち勝つため、**中苗～成苗**で充実の良い健苗を移植

- 育苗日数：30～40日
- 播種量：80～100g/箱
- 播種後14日後、21日後頃に追肥を行う（窒素成分1g/箱）

②複数回代かき、米ぬか散布

○荒代と植代の間隔を**2週間空け**、**発芽した雑草を埋め込む**

○**移植直後に米ぬかを60～100kg/10a散布**
→発芽に酸素を必要とする雑草の出芽を抑制

「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は初期の分けつが確保しやすい品種です。分けつを確保して稲が水面を覆うことにより、雑草の生育を抑えることができます。

③水田除草機による機械除草

○作業の時期が遅れないように注意！

④深水管理

○移植直後は**5cm**、その後生育に合わせて**10～15cm**

- 雑草（ノビエ）の葉先が**水面から出ない深さ**で管理
- コナギやホタルイには効果が低いので注意

深水管理のイメージ

(2) 病害対策

①ほ場選定

- 病原菌は残渣や土壌中で越冬するので、**常発ほ場を避ける**
- いもち病は水滴から侵入するので、**朝露が乾きにくい日当たりや風通しの悪いほ場を避ける**

②温湯消毒

- 発芽率を保ちながら殺菌効果を高めるため
- 60～62℃で10分間**処理する
- ※たっぷりのお湯を使い、籾を入れた時の温度低下を極力防ぐこと！

③いもち病対策

- 置き苗**はいもち病の発生源となるので、速やかに**除去**する
- 有機JASで使用可能な農薬（カスガイシン剤等）を散布する
- ※カスガイシンは耐性菌の発生リスクがあるため連用しない！

「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」の葉いもちの抵抗性は“中”、穂いもちの抵抗性は“やや弱”です。周辺の草刈りを行う等、風通しの良い、いもち病の発生しにくい環境を整えましょう。

(3) 害虫対策

①斑点米対策

○**畦畔の草刈り**

・周りに早生品種が多いほ場では7月上旬の草刈りもしましょう！

・**色彩選別機**を活用して**斑点米を除去**しましょう！

※草刈りが有効でないカメムシもいます。

②次年度の病虫害対策

- 秋耕で害虫が越冬する“**ひこばえ**”(刈株再生芽)を**速やかにすき込み**ましょう！

(4) 土壌施肥管理対策

近年の猛暑下では登熟後期まで葉色を維持するのが難しく、**地力の維持**や**追肥・穂肥の施用**が重要です。

①有機物や家畜ふん堆肥で地力を維持！

○作物残さ

- 稲わら、麦わら等の残さは焼かずすき込むことで、地力維持効果が期待できます。

○牛ふん堆肥

- 収穫残さに加えて、牛ふん堆肥を連用することで、地力の向上を図れます。

・一般的に、堆肥の地力増進効果の大きさは**牛ふん > 豚ふん > 鶏ふん**となります。

※より詳しい内容は下記を参照してください
「オーガニック近江米の手引き」P4～P5
「水田土づくりマニュアル」

②追肥と穂肥で葉色を維持！

有機質肥料は化成肥料と異なり、**肥効がゆっくり**と現れます。

○追肥

初期生育が旺盛になると幼穂形成期までに葉色が極端に落ちる可能性があり、**葉色が落ちる前に追肥**を行います。

○穂肥

肥効が緩やかなため**幼穂形成期の1週間前**と、**1回目施肥の2週間後**の2回に分けて施用します。

※より詳しい内容は「きらみずき」栽培ごよみ（オーガニック栽培）を参照してください。

「きらみずき」ポイントQ

近年の猛暑下では葉色の維持が難しく、**穂肥はなるべく減肥せず施用**するのが望ましいです。ただし、周辺ほ場のいもち病発生状況には注意が必要です。

オーガニック「きらみずき」栽培こよみ

「オーガニック近江米」の手引き
とあわせてご利用ください

令和7年(2025年)版

令和7年1月 滋賀県農業技術振興センター

<施肥>

- ・下表の基準量を目安に施用
(別途移植直後の米ぬか散布を前提としている)
- ・米ぬかを散布しない場合、または6月下旬頃に
葉色が淡くなり始めたら葉色3.8以下になるまでに
()内の量を目安に追肥
- ・穂肥は**幼穂形成期(幼穂長1mm)の1週間前(7月中旬)**
および、1回目の2週間後を目安に2回施用

<育苗・移植>

- ・温湯消毒は60~62℃で10分間
- ・温湯消毒後の種子は直ちに浸種するか、十分に風乾して低温低湿度で保管する
- ・播種量は乾粃80~100g/箱
- ・30~40日育苗とし、充実の良い中苗~成苗を育成
- ・播種後14日目と21日目ごろに追肥を行う(窒素成分1g/箱)
- ・5月20日から30日を中心に移植
- ・栽植密度は下表の基準を参考とする

湖辺、平坦	中山間
60株/坪	60~70株/坪

<水管理>

- ・代かき前にあぜ塗りや畦畔補修で漏水対策
- ・深水管理の実施(移植直後5cm、生育に合わせ10~15cm)
- ・茎数300本/m²を目安に溝切り・中干しを実施
- ・出穂前後各3週間は常時湛水管理
- ・品質低下防止のため刈取予定日の5日前までは間断かんがいを実施

<雑草対策>

- ・代かき(荒代と植代)の間隔を2週間空け、発芽した雑草を土中に埋め込む
- ・雑草が多いほ場では荒代を2回、植代を1回実施し、それぞれの間隔を2週間空ける
- ・植代の翌日もしくは翌々日に移植
- ・移植当日もしくは翌日に米ぬかを60~100kg/10a散布
- ・水田除草機による機械除草を実施
1回目:植代後10日以内 2回目:1回目から10日以内
雑草の多いほ場では3回目を実施(2回目から10日以内)

<病害虫対策>

- ・有機農産物JAS規格で使用可能な農薬以外は使用しない
- ・過去にいもち病やウンカ類などの病害虫が多発生した地域・ほ場での栽培は避ける
- ・いもち病の発生源となる余剰苗は速やかに除去する
- ・斑点米カメムシ類の対策は、畦畔の2回連続草刈りと色彩選別機を利用して行う
- ・イネ縞葉枯病などのまん延を防ぐため、収穫後早期に耕耘を実施する

<収穫・乾燥・調製>

- ・籾黄化率85~90%が刈取適期
- ・乾燥時の仕上げ水分は14.5%
- ・1.85mm以上の網目で選別

○特性概要

項目	きらみずき
幼穂形成期	7月24日
出穂期	8月14日
成熟期	9月21日
稈長	74cm
穂数(/m ²)	315本

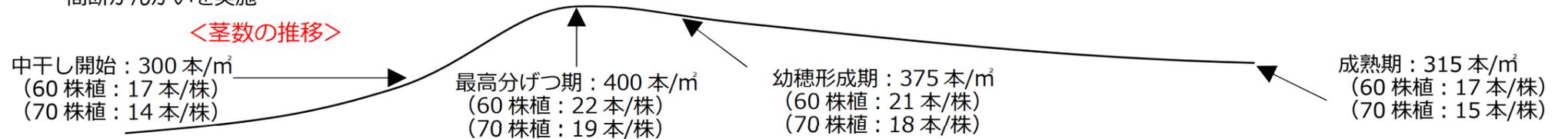
R4~R6年の平均値
(5月下旬・中苗移植、農技センター内)



施肥法	地帯区分	基肥	追肥	穂肥I	穂肥II	合計
全層	湖辺粘質、高地力田	3kg	(1kg)	3kg	3kg	9(10)kg
	湖辺砂質、平坦、中山間	4kg	(1kg)	3kg	3kg	10(11)kg
側条	湖辺粘質、高地力田	2kg	(1~2kg)	3kg	3kg	8(9~10)kg
	湖辺砂質、平坦、中山間	3kg	(1~2kg)	3kg	3kg	9(10~11)kg
大豆跡		0~2kg	(1~2kg)	3kg	3kg	6~10kg

※10a当たり窒素成分量

※肥料は「有機アグレット」を想定
施用する肥料により肥効が異なるので、追肥で生育を調整する



月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月~					
生育期区分		育苗期	移植期	活着期	有効分けつ期	無効分けつ期	幼穂形成期	穂ばらみ期	出穂期	登熟期	成熟期	
水管理	浅水代かき・自然減水	やや深水	深水管理	中干し	間断かんがい	★常時湛水管理(出穂前後各3週間)			間断かんがい			
栽培管理のポイント(★は注意事項)	<p>★病害虫の常発地域を避けて栽培</p> <p>★漏水防止対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な代かきにより漏水を防止 ・あぜ塗りや畦畔補修を実施 	<p>★健苗の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・温湯消毒は60~62℃で10分間実施 ・温湯消毒後は60~62℃で10分間実施 ・うす播き、均播を励行 ・温湯消毒後は60~62℃で10分間実施 ・30~40日育苗とし、充実の良い中苗~成苗を育成 	<p>★代かき・施肥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基肥は基準量を目安に施用 ・複回数代かきにより雑草の発生密度を低下 	<p>★移植</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基準の栽培密度で移植 ・5月20日から30日を中心に移植 ・植代の翌日または翌々日に移植 	<p>★雑草管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・残草状況に応じ、2回目から10日以内に3回目実施 ・1回目機械除草(1回目から10日以内) ・2回目機械除草(植代後10日以内) ・深水管理(移植直後5cm、生育に合わせ10~15cm) ・移植直後に米ぬかを60kg/10a散布 	<p>★溝切り・中干し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中干し終了後は通常の水管理 ・溝切り・中干しは茎数300本/m²を目安に実施 	<p>★穂肥施用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素成分1~2kg/10aの追肥を行う ・穂肥2回目以降の葉色が淡ければ、出穂4日前までに窒素成分6kg/10aを基準に分散 	<p>★畦畔草刈り(出穂2~3週間前)</p> <p>★畦畔草刈り(出穂期)</p> <p>★カメムシ防除のための畦畔2回連続草刈り</p>	<p>★刈取予定日の5日前まで間断かんがいを実施</p> <p>★登熟後半の水管理</p>	<p>★適期収穫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刈り遅れると胴割れや茶米が増加するので注意 ・籾黄化率85%~90%が刈取適期 	<p>★乾燥調製</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適正な乾燥時の仕上げ水分は14.5% ・1.85mm以上の網目で選別 ・乾燥米を防止 	<p>★土づくりの徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病害虫発生抑制のため、収穫後早期に秋耕を実施 ・稲わら腐熟促進、多年生雑草の抑草および牛ふん堆肥等の有機物施用